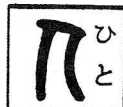


就職



菅波

茂氏

アジア医師連絡協議会 (AMDA) の代表



昭和21年広島県生まれ、49歳。52年岡山大大学院を修了、56年に岡山市内に菅波内科を開業。54年のカンボジア難民への医療支援のNGO活動に入り、59年にAMDAを設立。これまで健康文化賞、読売国際協力賞、日国際交流賞などを受賞。

今から二五年前、まだ大学紛争の余燼冷めやらぬなか、岡山大の大学院生だった菅波さんは谷口澄夫学長(当時)の自宅書齋に通されていた。タイとビルマの国境近くでの「クワイ河医学踏査隊」の実施を計画するに当たり、当国からビザを得るには学長の推薦状が必要だったのだ。

日本の国際医学交流は大学当局が行うものを中心で、学生が主体のものはほとんどない。菅波青年の説明を聞いていた谷口学長は、最後に「分かった。谷口個人として、必要な印鑑はいくらでも押そ

う。岡山県の将来を考えると、君たちのやろうとしていることは大切だ」と励

してくれたという。翌昭和四十七年、総勢二十八人からなる踏査隊が出発。邦楽演奏キャラバンも兼ねた、この若くも賑やかな海外交流が、今日、一五カ国九〇〇人の会員を擁する「AMDA」に成長するとは、菅波さんも、また谷口学長も想像しなかっただろう。

しかし、なぜアジアであり、医療協力なのか。「高校二年の時、写真で若い日本兵が死んでるのをみてね。太平洋戦争のさなか、自分と同じほどの年齢の兵士が、ニューギニア戦線で迎え

た死。海岸の浅瀬に顔を半分突っ込んで無惨な姿をみて、なぜこんなことになったのか、金縛りに遭ったような衝撃を受けたという。

学生時代にアジアを放浪。多くの人々に会うなかで、「第二次大戦の時に日本がやったことの反対のことをすればいい」と知る。大学院では、「アジアをやりたい」との申し出に「いいだろう」と禅問答のような許可を与えた、公衆衛生学の緒方正名博士にはいまでも感謝する。

数え切れないほどの国際的な救援医療活動を行ってきた菅波さんだが、最初にはかばかしいものではなかったようだ。昭和五十四年、二人の医学

生とともにカンボジア難民の医療支援に赴く。初の本格的な救援活動となるはずが、現地では何もできなかった。NGOにも「業界」があることを思い知らされたのもこの頃。「善意だけではだめだ、システムがない」と手探りで組織作りが始まる。実際、AMDAのようなN

GOは国際的にみてもユニークである。まず、特定の宗教や政治団体の背景がない。それにプロジェクト主義。それぞれの救援プロジェクト毎にスタッフを募る。現地での連携も、それぞれのケースに合わせて融通無碍に変えていく。



'94年4月の日本・ Bangladesh 友好病院開院式にて現地のドクターたちと。

療所でありながら一四九床の老健施設、八五床のデイケア施設、訪問看護ステーションを付設。「耳鼻科はうちの女房がやり、内科は二人の若い医師がいてくれるんです。一人が出ていくときは後の二人が頑張る(笑)」。地域に根ざした医療は、自院でも実践中である。

最近ではAMDA以外にも、次々と国際貢献ネットワークを作り出しているが、最も力を入れているのはAMDA国際大学の開校だろう。

実は、AMDAは国連からカテゴリー2(経済社会理事会での討議権、議決権を持つ)に認定されるNGO。これが、カテゴリー1(さらに政策提言権が加わる。現在世界に四一団体)になれば、大学構想も非常に現実的になる。「日本が平和に貢献しようとしたとき、医療と教育というのは分かりやすい。その意味で医療人には責任、という役割がありますね」。

非常に静かな口調だが、語られるその夢は遙かなり、またそれを実現させてきた人である。

アフリカへの情熱と

ろ幸運にも採用され、94年11月から勤務する。

が急にフレンドリーになったり、